(17)

氏名（生年月日）　星野富美子（ホシノ フミコ）
本　　籍
学位の種類　医学博士
学位授与番号　乙第49号
学位授与の日付　昭和42年4月21日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**軽症糖尿病の自然経過とそれからみた糖尿病の判定基準に関する考察**
論文審査委員　（主査）教授　小坂　樹徳
（副査）教授　三神　美和，教授　久保田くら

論文内容の要旨

Ⅰ．研究目的　近年，糖尿病の領域においても，早期発見，あるいは発病阻止ないし重症化対策の面から本症の自然経過が注目されるようになつた．したがつて集団検診を通じて新たに軽症糖尿病と判定されたものの長期にわたる自然経過を知ることは，かかる症例の管理の実際に資する点が多く，また同時に糖尿病の判定基準として取げ上られている方法が適当か否かを知る上に最も重要なことの一つである．本論文は同一集団に対し飽食試験を経年実施し，これら問題に検討を加えたもである．

Ⅱ．研究対象ならびに方法　試験当日米飯2杯以上の朝食を食べさせ，食後2時間と3時間の間の毛細血管血糖が Hagedorn-Jensen 法で 140mg/dl以上のもの，および血糖 139mg/dl以下でも同時に採取した尿で Tes-Tape 陽性のものを都内某勤労集団より選出し，既知糖尿病を除外した症例に飽食試験を施行した．すなわち早朝空腹時，ならびに朝食として米飯 350g以上を摂取せしめて後，1，2，3時間の血糖を測定し，空腹時血糖値 140mg/dl以上のものを除外し，未治療のまま3～7年間にわたつてほぼ同季節に飽食試験を行ない得た90名を研究対象とした．糖尿病研究班の判定基準により，2時間，3時間血糖値が共に 140mg/dl以上を糖尿病，いずれか一方が 140mg/dl以上，他方は 139mg/dl以下を疑糖尿病，共に 139mg/dl以下を非糖尿病とし，さらに糖尿病については2時間，3時間値共に 180mg/dl 以上を D_3，共に 160mg/dl以上を D_2，共に 140mg/dl以上を D_1 と細分し，その経年的推移を検討した．

Ⅲ．成績　1）初年度軽症糖尿病，疑糖尿病，非糖尿病と判定し，未治療のままその後7年間の経年経過をみると，D_3 の判定をされたものは観察期間中ほとんど D_3 のまま推移した．D_2 以下の各群では各年度の判定が変つたが，いずれの群も順次増悪の傾向を示さなかつた．

2）6年間の各年度別の判定区分をみると，D_3 は16%前後，D_2 は7%前後，D_1 は22%前後，疑糖尿病は31%前後，非糖尿病は24%前後であつた．すなわち個々の症例の各年度における判定は種々変動したが，集団における D_3, D_2, D_1, 疑糖尿病，非糖尿病の判定区分百分率はほぼ一定していた．

3）経年中増悪する例および好転する例を検討した結果，次年度以降 D_3 と判定されたものは，初年度糖尿病と判定された群では36%，疑糖尿病および非糖尿病群では約7%で，前者に多くその差は有意であり，また糖尿病群では D_1, D_2 の順で高率であつた．同様に経年中，非糖尿病の判定を受けたものは，初年度糖尿病と判定された群で約40%みられたが，疑糖尿病および非糖尿病群で約70%と著しく多くその差は有意であつた．

4）最高血糖値についてみると，いずれの判定区分でも1時間値が最高値を示すものが圧倒的に多く，2時間値，3時間値が最高値を示したものとの間に高度に有意の差がみられた．更に D_3, D_2 群においては1時間値 200mg/dl以上のものが多かつた．特に経年中 D_3 になる例は初年度2時間値，3時間値が共に 140mg/dl以上で，更に最高血糖値 200mg/dl以上を示したものに多く，非糖尿病になる例は 200mg/dl以下の群に多く，それぞれ高度

に有意の差がみられた．

Ⅳ．結論　糖尿病研究班の判定基準により軽症糖尿病，疑糖尿病，非糖尿病と判定された各群を未治療のまま長期間観察した結果，いずれの群も観察期間中必ずしも増悪の傾向のないことが明白にされた．また個々の症例の毎年の判定結果はそれぞれかなり相違したが，同一集団における糖尿病，疑糖尿病，非糖尿病の占める割合の経年的推移はほぼ変動しなかつた．更に経年中増悪および好転する例の検討から，糖尿病研究班が飽食試験において2時間，3時間値共 140mg/dl以上を糖尿病と判定したことの妥当性を支持する結果を認めたが，初年度 $D_1D_2D_3$ と判定したものの約40%は未治療のまま経年観察中非糖尿病と判定される事実は，飽食による判定陽性者全員をそのまま糖尿病として取扱うことの危険性を示唆するものと考えられた．最高血糖値の検討から従来の飽食試験の判定基準に，更に最高血糖値 200mg/dl以上を取入れることによつて，代謝異常のほぼ固定した糖尿病と，代謝位相の変動しやすい軽症糖尿病，疑糖尿病とを，従来の飽食試験の判定基準より，高い特異性をもつて判別し得ることが強く示唆された．

論文審査の要旨

著者は糖尿病の早期発見あるいは重症化対策と，本症の診断基準確立のため，糖尿病研究班の規定した飽食試験により，軽症糖尿病と判定された90名を未治療のまま7年間にわたつてその推移を検討した．その結果，軽症糖尿病の代謝位相は変動し易いが，必ずしも増悪の傾向をたどるものでないこと，および従来の飽食試験の判定基準に最高血糖値 200mg/dlを取入れることが代謝異常のほぼ固定した糖尿病の診断に重要であることを明らかにした．

本研究は糖尿病の診断と管理に新しい知見を加えたものであり，学術上価値あるものと認める．

主論文公表誌

軽症糖価病の自然経過とそれからみた糖尿病の判定基準に関する考察．

東京女子医科大学雑誌　第36巻　第12号　654～660頁（昭和41年12月）

副論文公表誌

2年3カ月間連続した心房性頻搏症の1例．

東女医大誌　**30**（12）3127～3130（昭和35）